高知大学大学院教職実践高度化専攻（教職大学院）NEWSLETTER（No. 11）

第 11 回　土佐の皿鉢ゼミ開催

（対面と Zoom 同期型オンラインによる開催）

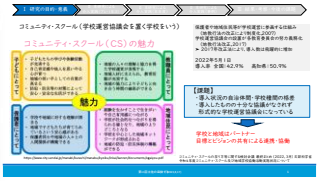
教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第 11 回土佐の皿鉢ゼミ」が、2023 年 8 月 17 日（木）に対面と Web 会議システム Zoom による同期型オンラインのハイブリッド方式で開催され、135 名の方々が参加されました。まず、中野俊幸専攻長より挨拶があり、高知県教育委員会教育次長 竹﨑　実　氏から「教育環境の変化と本県の取組について～高等学校を中心にして～」と題したご講話をいただきました。国内はもとより、高知県の教育課題に関する様々な視点から、子ども達の個別最適な学びや協働的な学びの大切さが説かれ、本専攻で学ぶ院生に対し、「本県の教育を変えていく必要があるが、それには多くの困難がある。祓渉の労を厭わず同じ目標を持つ仲間を増やし、想像力と先見性を持ち個々の取組を進めていく」期待が寄せられました。そして、各発表会場では、多様な教育課題を複眼的視点から捉え、理論に基づいて深く掘り下げる探求がなされました。

ここでは、皿鉢ゼミで発表した院生から、それぞれの研究課題におけるこれまでの成果と、今後の課題を語ってもらいました。

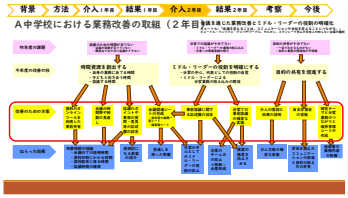
【学校マネジメントコース】

M2　近藤史恵さん　　地域連携を活かした学校運営－地域に開かれた信頼される学校づくりの実現(学校運営協議会)－

学校運営協議会が「熟議」の場として成立し、自覚や責任に基づく学校の役割、地域の役割、地教委の役割が分担されることで、学校運営力の向上に結びつくことを目指し介入実践を行いました。今後は、協議会の持続可能な体制づくりや、協議会が活性化することによる学校運営の変容について考察を続けていく予定です。



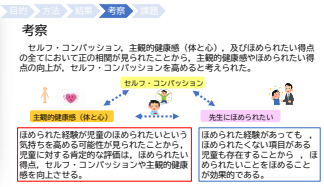
M2　濵田幸伸さん　「令和の日本型学校教育」を実現するための「チームとしての学校」の在り方について
－働き方改革を視野に入れた業務改善とミドル・リーダーの役割－

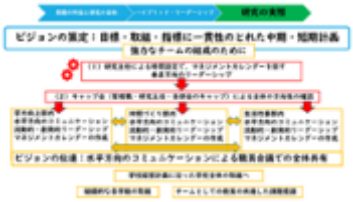


校内の会議に着目し、教員の子どもに向き合う時間資源の創出とミドル・リーダーの役割の明確化のために、議題一覧や協議のためのシートの開発、オンラインツールを活用した資料共有の方法、会議システムの見直し等の提案をしました。今後は、取組を学校組織に浸透させる方策が求められます。

M2　松木　啓さん　自己指導能力を育むための校内支援体制の構築－セルフ･コンパッションに着目して－

セルフ・コンパッション、体と心の主観的健康感、及びほめられたい得点の全てにおいて正の相関が見られました。このことから、継続実施しているマインドフルネス瞑想及び面談の効果検証に加え、児童がどのようにほめられたいのかなどを調査・分析することで、効果的な児童支援の開発につながると考えました。



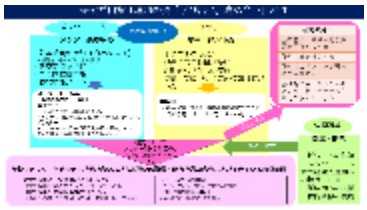


M2　山﨑一平さん　組織的な学校運営への参画－ボトムアップの意識改革－

学校経営計画を核とした、当事者性と見通しをもった学校運営の実現のために実装した、教職員が組織的に学校運営に参画する仕組み（活動システム）について、ピーターグロンの「ハイブリッド・リーダーシップ」の理論と実践の往還の部分と、実践を中心に発表しました。

M1　赤崎浩平さん　不登校の未然防止に向けた協働体制の充実－ピア･サポートに焦点を当てて－

生徒指導上の諸課題の一つとして挙げられる不登校について、ピア・サポートに焦点をあてて、新規不登校を生まない協働体制の構築に向けて研究しています。今回は、生徒の主観的健康感及び友達支援に関する意識について調査した結果を報告しました。

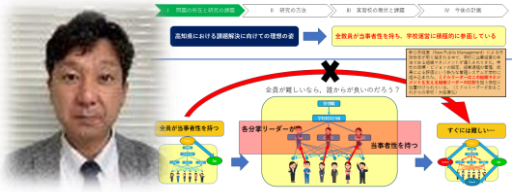


M1　大勝由美さん　協働意識を高めるチーム学校づくりの改善方策

小学校におけるメンター制に焦点を当て、管理職及び研修コーディネーターと連携を図りながら、メンター長の抱える負担軽減と若年教員をしっかりとサポートできる体制（メンターチーム会及び学年団）の見直しを図り、学び合い高め合えるメンター制構築に繋げることを目的としています。

M1　川村浩二さん　学校組織マネジメント力を発揮する協働体制づくり

組織力向上のため、協働体制づくりの方策を探ることを研究の目的としています。各教員に行ったアンケート等の結果から、学校運営に対しての当事者性の低さが課題として見えてきました。今後は、学校運営に対して当事者性をもったミドル・リーダーの校内育成の方策について研究を進めていきます。



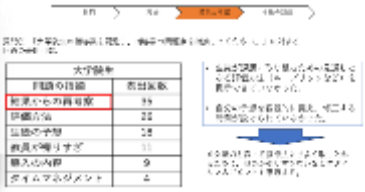
【授業実践コース】

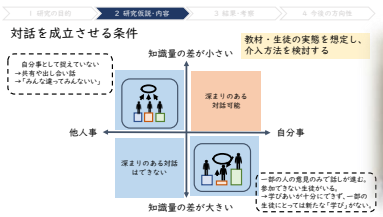
M2　池川潤也さん　高校理科における主体的・対話的で深い学びを実現する授業モデルの開発
ー生徒の学びの深まりを見取る形式的評価に着目してー

本研究における授業実践を通して、生徒の学びの深まりを「内容」と「学び方」に大別して見取りました。授業実践で得られた生徒の記述・協調学習の際の発話プロトコル・Approaches to learning アンケートの分析から、授業前後で生徒に概念変化が引き起こされており、授業モデルに一定の有用性があることが示唆されました。

M2　佐藤　晃さん　メタ認知を育てる理科学習指導法の研究

昨年度は、「見通し」と「振り返り」を取り入れた授業案を開発し、メタ認知を育てる上で初任者に不足しているものは何かを明らかにしました。今年度は熟練教師との比較を通して良い点と悪い点を明らかにし、その結果をもとにメタ認知を育てる理科学習指導法の開発を目指します。



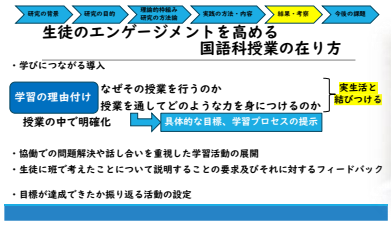


M2　杉本　瞳さん　国語科における学びの自覚を促す「対話」的活動の研究

深まりのある対話のための条件を整理し、教材に向き合った時の生徒の姿に基づいて仕掛けをすることが必要だと考えました。思考の前提となる読解内容をそろえること、情報交換をしてみたくなる手立て、自己選択の機会提供を、ロイロノートやメタバース等の ICT を使い授業実践しました。効果的な授業になったと考えています。

M2　中谷憲二さん　向社会的行動につながる道徳性を育む道徳授業の在り方の研究
ー「共感力」と「道徳推論の力」の育成に焦点を当ててー

アイゼンバーグの向社会性理論をもとにして、道徳科の授業の中に視点取得の場面と考え議論する場面を設定して道徳性を育む道徳授業を実践しました。共感力と道徳推論の力を育む授業は、視点取得の力と向社会的行動を行おうとする意識の向上に寄与することが示唆されました。

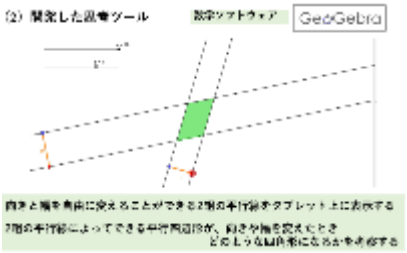


M2　柳花一輝さん　生徒のエンゲージメントを高める国語科授業の在り方について

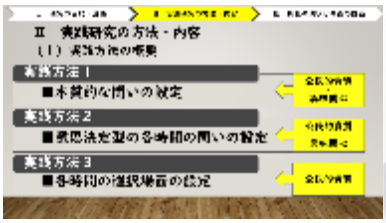
国語科授業における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、エンゲージメントという概念に着目し、研究を進めています。２年次前期では、授業の導入において、学習の理由付けを実生活と結びつけて行うことが、生徒のエンゲージメントを高める上で有効だということを確認することができました。

M2　吉本果矢さん　思考ツールとして ICT を活用した算数授業の研究

数学ソフトウェア GeoGebra を使って開発した、思考ツールを活用して「二組の平行線でできる四角形」「数の家」の授業デザインと実践、その成果と課題について検証しました。どちらの授業も、算数授業における主要な活動において ICT 活用が有効であることが示唆されました。



高知大学大学院教職実践高度化専攻（教職大学院）NEWSLETTER（No. 11）

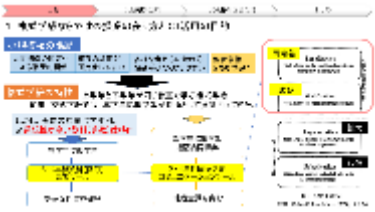


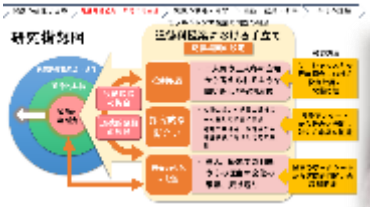
M1　田内南央さん　考察・構想・表現する歴史的分野の授業の研究

中学校社会科歴史的分野において意思決定を伴う構想学習を行うことで、生徒の歴史的分野への興味関心の高まりや公民的資質の涵養がみられるのかを見取り、日本中世史における構想学習の有意性と可能性を立証することを研究しています。

M1　樋口桃子さん　複式学級における協働的な学びの促進を図る ICT 活用

ICT を効果的に活用し、複式学級の長所を生かした異学年協働学習を実現し、小規模校の課題の改善を図ることを目的とし、コミュニケーションツールや思考ツールとして ICT を活用した授業実践を行いました。今後も協働的な学びの促進を図る ICT 活用の研究を進めていきます。





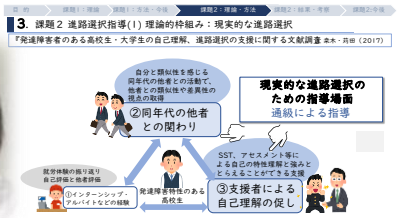
M1 安田直子さん　道徳的判断力を高める話合い活動の在り方

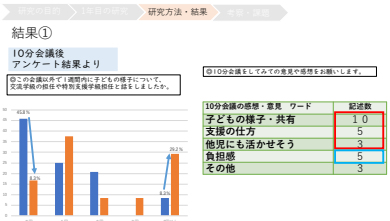
道徳科において道徳的葛藤の場面を設定して探究的な話合いを組織し、児童が様々な立場に役割取得できる機会と自身の思考の変化を認識し得る活動を取り入れた学習を行って、その効果を検証し、児童の道徳的判断力を高める道徳授業の在り方を明らかにしたいと考えています。

【特別支援教育コース】

M2　柏木　妙さん　社会参加を見据えた自己理解と進路指導

多様な教育的ニーズのある生徒の社会参加に向けて通級指導の実践報告をしました。「同年代の他者との関わり」と「自己理解」の２つの内容を設定しました。その結果、会話に対する気持ちが楽になり、学校生活ではクラスメートに声をかけるようになりました。スキル定着が二学期の課題です。



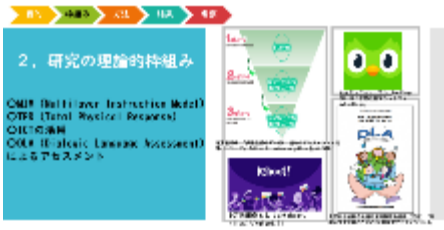


M2　高野　彩さん　困り感のある児童の支援体制づくり

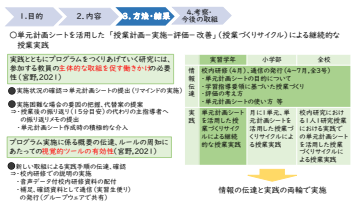
自閉症・情緒障害特別支援学級(以下情緒学級)児童が交流学級で学習することを目指して、全校を対象に①交流学級の受け入れ体制整備、②情緒学級の自立活動充実の視点で研究を進めています。①としての週１回の 10 分会議は、担任同士の日常的な情報共有につながりました。

M2　西脇高峰さん　日本語教育の指導方法の検討

日本語教育の方法の検討として、MIM やPhysical Activity、ICT などの活用を研究したいと考えています。今回は授業参観と共に MIM-PM と DLA のアセスメントテストを用いて公立小学校に在籍する３人の児童の実態を把握しました。



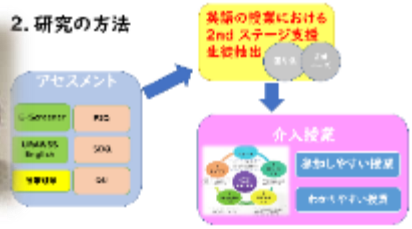
M2　渡邉莉都さん　生きる力につながる知的障害教育における教科指導の在り方について

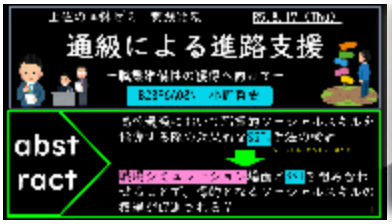


単元計画シートを活用した「授業計画−実施−評価−改善」の授業づくりサイクルの組織的・継続的な実践が、的確な学習評価や授業改善につながっているかの検討と、カリキュラム・マネジメントの視点で指導計画の作成や授業実践を行うツールとなる指導内容配列表の検討を行っています。

M1　井上郁子さん　英語学習に困難のある生徒への効果的な支援方法の研究

中学校英語の授業において、学習に困難のある生徒を言語面のアセスメントと心理面のアセスメント、行動観察から分析し、２nd ステージ支援対象生徒を抽出しました。今後、ユニバーサルデザインの視点を入れながら介入授業を行い、個の支援を意識した効果的な指導法を検討していきます。



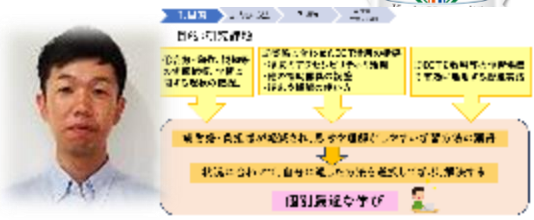


M1　小野哲史さん　高校通級における進路支援−職業準備性の獲得へ向けて−

高等学校通級において職業に就くために必要なソーシャルスキル獲得を支援できる SST の手法について研究しています。職場をシミュレーションした環境と組み合わせた SST で標的行動の形成を効果的に図ることができるという仮説を検証したいと考えています。

M1　杉元健太さん　肢体不自由特有の学びにくさの改善に向けた指導・支援

－ICT 活用を中心においた個別最適な学びの実践－

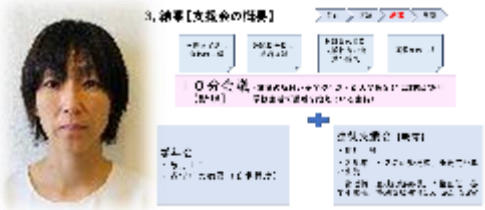


肢体不自由を有する児童生徒の ICT を活用したより学習しやすい方法を明らかにするために実践研究に取り組んでいます。アクセシビリティの活用や ICT 操作スキルの習得・活用に向けた自立活動の指導、授業展開や ICT の活用等の見直しを含めた授業改善を行い、効果を検証していきます。

M1　安岡知美さん　知的障害特別支援学校における金融教育

キャッシュレス社会や 18 歳成人年齢引き下げを見据え、高知と首都圏の特別支援学校で質問紙調査を実施。生徒が金銭を計画的に使う経験が不足している実態と、教員は今後の金融教育の重要を認識していることが判明しました。今後金融教育のカリキュラム作成と授業実践に取り組みます。

M1　山沖智子さん　教育の気づきから生徒の特別な支援へつなげる体制の充実



生徒に関する教員の気づきを拾い上げ蓄積・共有し具体的な支援につなげる体制を構築することを研究の目的にしています。10 分間で課題の把握・原因・支援方法まで検討・共有する「10 分会議」を何度も実施することで支援の継続・発展・意識の醸成が図られることを期待しています。

【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校マネジメントコース】「学校の組織化とコミュニケーション」を協議テーマに、院生７名の研究を踏まえた意見交流を行いました。院生の発表から「人間関係の構築・維持のためのコミュニケーション」及び「学校の組織化を図るためのコミュニケーション」という大きく２つの目的を別とするコミュニケーションの存在が明らかになりました。前者については、現在の若年教員の育成や教員の協働化のための必要性が、後者については、実現に「分掌リーダーの育成」、「全員参画の学校運営体制」、「会議内容の整理・精選」などの必要性があげられました。また教職員、保護者や地域との協働には、目的の共有化が必須であり、明確な根拠からの理解や納得感を獲得する必要性があることも語られました。しかし、学校現場の業務改善の多忙化が解消されなければ、これらのコミュニケーションの実現は難しいため、国や地方公共団体による業務改善のための支援を求める意見も出されました。発表者全員からコミュニケーションの必要性が示されましたが、今後、コミュニケーション行為そのものの在り方をより精緻化する必要があるとまとめられました。

【授業実践コース】「対話的な学びを実現するために」というテーマについて、「認識のズレにより対話がうまれる」という視点から、今年度の実践を基に協議しました。はじめに院生より各教科における実践事例を提示し、協議をしました。事例を通して、他者との考え方のズレだけでなく、解がある場合は、事象のズレや既習とのズレを明確にしていくという教科特有の性質があることや、教師の役割として、ズレを予想・想定し明確にして、ズレをどう生かしていくのかを考えておくことが教科の本質にせまるための手立てに繋がるということが分かりました。ズレとはどういうものなのか、どういう種類があるのか、ズレを私たちがどう認識すると良いのかまた、どう生かせば良いのかなど教科・校種を超えた有意義な時間をもつことができました。

【特別支援教育コース】インクルーシブ教育推進の視点から「学校間における交流及び共同学習の充実に向けて」をテーマにグループ協議を行いました。小中学校、特別支援学校小中学部グループと、高等学校と特別支援学校高等部グループに分かれ「交流の意義（目的）」「交流することの良さ」「交流内容」「実現していくための糸口」について意見交流をしました。幼少期のつながりを継続させて関わりをもち続けることの大切さ、そのための就学前からの交流及び共同学習についての意義や意図を保護者や保育者、教員が共有しておくこと、どうすれば学び合える活動となるのかを考えること、それらは教員の指導力向上にもつながるといった意見が出ました。また、学校の一部関係者の取組としてではなく、管理職発信により学校全体で交流及び共同学習の意義を理解していく必要性や、小中高等学校教員と特別支援学校教員がお互いを知り合い理解し合うこと、互いの情報共有が、インクルーシブ教育時代に求められる交流及び共同学習につながっていくのではないかと考えました。

久しぶりの対面での発表に、それぞれの院生が自身の研究を通し、多くの参加者と意見を交わしました。高知県の子ども達の健全な成長を願いつつ、様々な教育課題解決に向け、教員として最善を尽くすことであらゆる支援につながるであろうという期待が多く寄せられました。

次回「第 12 回土佐の皿鉢ゼミ」は**2024 年 2 月 10 日（土）**開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長　中野俊幸
編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員
発行日：2023 年 9 月 8 日
事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター
〒780 - 8520 高知県高知市曙町 2－5－1（教職大学院係）
TEL　088-844-8457
E-mail ks33@kochi-u.ac.jp